

現代大学生の友人関係とふれ合い恐怖及び孤独感

～相互の関連と携帯電話の使用状況による違いの分析～

三尾谷 明宏

1. はじめに

最近の大学生における対人恐怖的心性の症状として、対人恐怖にみられる身体的主題を訴えず、会食や雑談場面などの人間関係が深まる場になると不安を生じる病態で「ふれ合いの場での対人恐怖」とされているものがあり、これは「ふれ合い恐怖的心性」と呼ばれている。現代青年の友人関係の取り方とふれ合い恐怖的心性には共通する心理的傾向があり、さらにふれ合い恐怖と孤独感には関連があることが明らかになっている。現代青年の友人関係の形成に欠かせないものとして携帯電話が挙げられ、携帯メールの使用頻度が友人との関係性の強化・補強という役割を果たすと同時に孤独感に低減効果をもたらす、一方でメールという間接的なコミュニケーションを回避する青年は、直接的な対人関係からも回避的となっていることが明らかになっている。

2. 目的

本研究では以下の3つを目的とした。①大学生を対象に友人関係の取り方とふれ合い恐怖、孤独感との関連についての検討をおこなう。②携帯電話の使用状況が「友人関係の取り方」「ふれ合い恐怖的心性」「孤独感」にどのように影響を与えるかの検討をおこなう。③現代青年の特徴的な友人関係の取り方とふれ合い恐怖的心性の関連について、岡田(2002)の研究結果と現在の大学生ではちがいがみられるかについて比較検討をおこなう。

3. 方法

大学生を対象に「対人退却」「関係調整不全」の2つの下位尺度から成る「ふれ合い恐怖尺度」(岡田, 2002), 「不介入」「気遣い」「群れ」の3つの下位尺度から成る「友人関係尺度」(岡田, 1995), 「孤独感尺度」(工藤・西川, 1983), 「携帯電話の使用状況」の質問紙調査をおこなった結果, 111名(男46名, 女65名)の有効回答が得られた。

4. 結果と考察

はじめに目的①の検討をおこなうために友人関係尺度(不介入, 気遣い, 群れ), ふれ合い恐怖尺度(対人退却, 関係調整不全), 孤独感尺度(孤独感)の相関分析をおこなった。その結果, 友人関係尺度の「不介入」因子と「孤独感」で有意な正の相関がみられた。これより, 他者と距離をとるため1人の時間が増えるので孤独感が強くなると考えられる。友人関係尺度の「気遣い」因子とふれ合い恐怖尺度の「関係調整不全」因子において有意な正の相関がみられた。これより, 対人関係を円滑にしようと気を遣うことで対人関係が深まり, その結果生じる困難について過敏に感じてしまうと考えられる。友人関係尺度の「群れ」因子とふれ合い恐怖尺度の「関係調整不全」因子で有意な負の相関がみられた。これより, 対人関係が深まるような行動を取った結果生じる困難についてはあまり感じず対人関係に親密度を求めると考えられる。ふれ合い恐怖尺度の「関係調整不全」因子と「孤独感」に

において有意な負の相関がみられた。これより、対人関係が深まるような行動はせずに周囲の人間に八方美人のように振る舞うため、いつも周りには誰かがいるような状況で自分がひとりであると感じることは少なくなると考えられる。

次に目的②の検討をおこなうために、「携帯電話の使用状況」と性別が「友人関係の取り方」「ふれ合い恐怖」「孤独感」に与える影響をみるために友人関係尺度の「不介入」「気遣い」「群れ」、ふれ合い恐怖尺度の「対人退却」「関係調整不全」、孤独感を従属変数とした2要因分散分析をおこなった。携帯電話の使用状況は「1日の平均通話時間」「1日の平均メール回数」「SNSでメッセージを送る1日の平均回数」を設定した。全18分析で有意となったのは6項目であった。通話の有無において「不介入」と「関係調整不全」は通話を使わない者のほうが尺度得点が高い傾向がみられた。これより、通話をすることによって人と深い関係になることを避けるためや、必要以上に相手と関わりを持ちたくないからではないかと考えられる。SNSの使用回数において「群れ」はSNSの使用回数が多い者のほうが尺度得点が高い傾向がみられた。これより、SNSは複数人のグループでやりとりがおこなえるため、友人たちと盛り上がりがあったり楽しい雰囲気を共有したりするためにSNSの使用回数が多くなるのではないかと考えられる。「気遣い」においては通話、メール、SNSのいずれにおいても多く使う者のほうが尺度得点が高い傾向がみられた。これより、通話、メール、SNSのいずれも友人関係を円滑にするために使われているツールであると考えられる。

次に目的③の検討をおこなうために、現代青年の特徴的な友人関係の取り方とふれ合い恐怖的心性の関連について、岡田(2002)の研究結果と現在の大学生ではちがいがみられるか調べるために友人関係尺度の「不介入」「気遣い」「群れ」を従属変数とし、ふれ合い恐怖尺度を“対人退却のみ高い”“関係調整不全のみ高い”“どちらも高い”“どちらも低い”の4グループに分類して2要因分散分析をおこなった。全6分析で有意となったのは1項目であった。岡田(2002)の研究では、「気遣い」因子と「関係調整不全」因子の関連が示唆されていたが、本研究では「群れ」因子において関係調整不全の低い者のほうが尺度得点が高い傾向がみられた。これより、親しさへの熱望やたえず相手の気持ちを考えることよりも、その場だけの雰囲気を重要と感じその後の関係性までにはあまり重きをおかない傾向があるのではと考えられる。

引用文献

- 工藤 力・西川 正之 (1983). 孤独感に関する研究 (I) —孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討—実験 社会心理学研究, 22, 99—108.
- 岡田 努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354—363.
- 岡田 努 (2002). 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, 10, 69—84.